

ハワイの自然を巡る対立： 研究者と住民の異なる自然観

加藤 恵理

要 旨

ハワイ州はアメリカ合衆国の中で最も固有種が生息する割合が高い、豊かな生態系を有する土地である。これらの希少な種は、絶滅の危機に瀕しており、20世紀後半以降多くの自然保護団体がその保護のために活動してきた。自然保護団体の活動が目立ち、ハワイの地元の人々、とりわけ地域の自然に身近に関わってきた地元の動物を狩猟する住民が、保護活動に抵抗してきたことはあまり知られていない。生態系の保護が国際的な関心事となり、その対応が急がれる中、住民の抵抗は十分な注目を浴びてこなかった。近年こうした優先順位のつけ方が問題視されつつある。本論文では、ハワイの動物の導入と排除の歴史を踏まえ、自然保護団体と地元のハンターの対立に焦点をあて、後者から見たハワイのあるべき自然像を考察する。ハンターが外来種の駆除に反対する背景に、西洋との接触以来続く欧米からハワイに対する支配の構造、セトラー・コロニアリズムへの抵抗があることを指摘する。

I. はじめに

世界的な観光地であるハワイの魅力のひとつは、そのユニークな自然環境である。固有種の数が出して多いハワイは「固有種のホットスポット」と呼ばれる¹。しかし同時にハワイは「絶滅危惧種のホットスポット」とも称される土地であり、固有種の多くが危機に瀕している。これは西暦3世紀には始まったとされるハワイへの人間の移動、とくに18世紀以降の人々の移住によって多くの動植物が持ち込まれたことが要因のひとつである²。世界的に環境問題が意識されるようになった20世紀後半以降、ハワイの絶滅危惧種を救うべく多くの研究者が外来種の駆除に尽力してきた。しかしこうした駆除の活動は、ハワイの地元住民の間では複雑な受け止めをされてきた。ハワイに渡った外来種の多くが、野生化してから1世紀以上が経過し、人々の暮らしの一部となっており、とくに動物を生活の糧としてきたハンターからは大きな反対にあったのだ。

地元のハンターは、地域の自然に最も身近に関わってきた人々であるにも拘らず、彼/彼女の動物に対する考えはこれまで十分な注目を集めてこなかった。生態系保護が世界的な課題として認識される現代、ハンターは保護の重要性を理解できない、獲物を独り占めしたい、「身勝手な地元住民」としてまとめられがちで、反対の声はハワイの自然管理に関する決定の過程で十分に検討されてこなかつ

た。しかし環境問題を扱う先行研究では、自然保護を目的とする活動がしばしば地域住民の土地利用と衝突すること、そして住民の意見が議論に取り入れられない傾向が問題視されてきた。住民の理解を得ないまま保護活動を実施することの倫理的な問題、またその結果、自然環境だけでなく人種問題に発展する課題が生じてきたことが、とくにいわゆる途上国やアメリカ本土の先住民に注目した研究の中で指摘されてきた³。こうした流れから近年では、従来、科学の名のもとに無視されてきた地元の人々の多様な地域の自然との関係性に着目する研究が注目を集めている⁴。本論文でも、ハワイにおける外来種の歴史また住民にとっての動物の意味を考察し、従来とは異なるハワイの自然像とその自然と地元住民の関係性を提示することを目指す。

ハワイの自然の歴史とハンターの動物との関係を分析する際、セトラー・コロニアリズムの概念をひとつのキーワードとする。「セトラー・コロニアリズム」とは、セトラー（入植者）が、先住民から土地や資源を奪い、植民地に定住し、国家を形成すること、また先住民を継続的に排除し、不可視化し続ける社会構造を捉えるための概念であり、アメリカ合衆国（以下、アメリカ）社会、ハワイ社会について考える上で不可欠なものとして2000年代から学界で注目されてきた⁵。本論文の前半ではセトラー・コロニアリズムの観点から、ハワイの自然が動物を通じて欧米社会の理想の自然環境に変えられてきた過程を明らかにする。そして動物の導入と自然環境のための駆除のどちらもが、ハワイに対する植民地支配の延長線上にある動きであることを議論する。後半では地元住民の声を参考に、外来種の駆除に反対する背景に、セトラー・コロニアリズムへの抵抗の意図があることを指摘したい。

なお、本論文で使用する自然保護団体に関する資料は、主に自然保護団体が発行してきた広報誌の情報を参考にしている。ハンターに関しては、筆者がオアフ島とハワイ島で主に2015年と2017年にそれぞれ3週間程度行ってきたフィールドワークで集めた声を参考にしている。ハンターはまとまりのある集団ではないため、彼/女らの集団としての声を現地集める必要があった。また筆者によるインタビュー等の資料に加えて、ハンティング関連のデモの場で聞かれた声や、ハンティング関連の法案を議論する際のハンターの証言も参考にしている。

II. ヨーロッパ人による外来種の導入と植民地化

21世紀現在、地元のハンターが獲ったイノブタやヒツジなどの肉料理は、地元住民から「ソウルフード」とも称され親しまれている⁶。しかしこれらの動物は、最近になってハワイに持ち込まれたことがわかっている。ハワイ諸島は、地球の歴史上では最近まで人はもちろん動植物も存在しない場所だった。現在のハワイの主要な8つの島の内、最も古いカウアイ島が約510万年前に出現し、最も新しいハワイ島は約43万年前に形成されたとされる。一番近い陸地でも約3,000キロの距離があり、こうした環境からハワイに人間が到来する以前にたどり着いた動物は珍しい。6世紀前後に先住民がハワイに到達してから初めて、イヌやブタなどの動物がハワイに持ち込まれた⁷。意図せず持ち込まれた動物にはネズミなども含まれる。18世紀後半以降になってヨーロッパ人がハワイに到達した後、ハワイの動物は一気に種類が増加した。ヨーロッパ人が19世紀初頭までに持ち込んだとされる動物は、ブタ、ヒツジ、ヤギ、ウシ、ウマなどの家畜である⁸。

植民地拡大と動物の移動を研究した John R. Fischer によると、ヨーロッパ人による家畜の持ち込みには明確な政治的意図があった⁹。ハワイを最初に訪れたヨーロッパ人とされるジェームス・クックは、英国軍の「先住民の土地に行ったという証明として、家畜を置いてくる」という命令のために動物を船に乗せていた¹⁰。当時、ヨーロッパからの動物の持ち込みには多くの苦勞が伴った。動物は船旅に弱く、また大量の食料や水を必要としたため、動物を船に乗せて太平洋を横断するのは大変な苦勞を伴うもので、動物は旅の途中で息絶えることが多かった。たとえハワイに辿り着いても、動物を定着させるのには多くの障害があった。一般的に、気候に恵まれ外敵のいないハワイにおいて、外来の動植物は自ずと繁殖したように語られるが、実際の繁殖は容易ではなかった。クックが持ち込んだウシは、ハワイに到達はしたものの長い船旅で弱っており到着後間もなく息絶えた。クックはウシの定着に成功せず、これは1790年代になってジョージ・バンクーバーが達成した。クックと同様にバンクーバーもウシをハワイで繁殖させることには苦戦した。当時のバンクーバーは「カメハメハは最大限の注意を払ってウシの面倒をみてくれるだろう。ウシはすぐに繁殖し、先住民、そして将来ハワイを訪れる者らの役に立つだろう」と記しており、当時のヨーロッパ人が、近い将来、ハワイを食料基地にすることへの期待を込めて家畜を持ち込んでいたことを伝えている¹¹。

環境史の研究者 Alfred W. Crosby は、ヨーロッパ人による植民地の広がり の要因として動植物の影響を指摘したが、ハワイの植民地化にも同様の傾向がみられた。一般にヨーロッパ人が覇権を拡大した要因は、優れた武器や社会構造にあるとされてきたが、Crosby はその背景には動植物の、とくに家畜の存在があったとした。南北アメリカやオーストラリアなどにおいて、ヨーロッパ出身の移民が多数派となり、先住民が数的な少数派となった原因、つまりセトラー・コロニアリズムが成し遂げられた原因は「ヨーロッパ人、病原菌、家畜、雑草それぞれが相互補完的に作用してヨーロッパ人の覇権を確立したため」である¹²。動物は、ヨーロッパ人が到達した新しい土地を荒らすことで先住民の伝統的な生活の維持を不可能にし、またセトラーの生活を支えたのであり、植民地の形成に不可欠だった。ハワイの場合も、持ち込まれた動物は、先住民の生活基盤であった自然環境を崩し、また後に捕鯨船の世界的な経由地となるハワイで、乗組員やハワイに移住した欧米人らの食糧となった。動物はハワイにおける白人セトラーの特権的な立ち位置の形成に欠かせないものだったと言えよう。

ヨーロッパからのセトラーによってハワイに新たに導入された動物には、ウシやウマなどのいわゆる家畜だけではなく、愛玩動物のように彼/女らの生活をより快適に、豊かにすることを目的とした種も多くあった。1860年の地元紙 *The Commercial Advertiser* には、ヨーロッパの鳥を求める投稿が掲載されている。投稿者は、故郷のヨーロッパへの懐かしさを語った後で次のように書いている。「ホノルルを行き来する船の所有者の方々をお願いします。大きな費用がかからなければ（中略）鳥をハワイに連れてきて頂けませんか。ハワイにはもっと鳴き鳥が必要です¹³。」こうした要望に応えるかのように、1900年代にはハワイに鳥を増やすことを目的とするクラブが複数設立された¹⁴。

娯楽のためのハンティングの対象となる動物も大量に導入された。当時は植民地を広げるヨーロッパ人の間で、現地のエキゾチックな動物を獲ることが流行しており、多くのハンターが競って剥製（トロフィー）を作っていた¹⁵。19世紀末の時点で、世界各地のハンティング情報を扱う雑誌 *Outing*

Magazine に、ハワイで火山島の独特な地形を楽しみながらハンティングに興じるヨーロッパ人の様子を伝える記事が掲載されている¹⁶。故郷とは全く異なる自然の中でのハンティングがロマンチックに紹介され、ヨーロッパの人々の異国への関心を掻き立てていたことが想像される。ハワイにはいわゆる「トロフィー」になるような動物はおらず、その意味ではハンターにとって魅力的な土地とはいい難かったが、ハワイは気候が安定しており獲物さえいれば年中ハンティングが楽しめる土地になる可能性があった。1927年になると、農林委員会漁猟課がハンティングの対象の動物の導入を推進し、「ハンティングのための獲物の牧場を発展させ、これらの動物をハワイの各地で繁殖させる」という目標を掲げた¹⁷。オアフ島のカイルア地区には、モカブ猟獣牧場が作られ、同牧場には主にアメリカ本土、日本、オーストラリア、東インド、アフリカ大陸など世界各地から鳥類が持ち込まれた。ここで繁殖された多くの種がハワイ全土に放たれた¹⁸。たとえば1930年には、ハンターに人気があったコウライキジ1,500羽余りがオアフ、カウアイ、モロカイ、マウイ、ハワイ島に放たれた。30年代後半には規模が拡大し、毎年4万羽以上の鳥がハワイの様々な地域に放たれるようになった。1938年、農林委員会の委員長は、モカブ猟獣牧場について次のように語っている。

ハワイを国際的な鳥の安息地に作り替えることは可能だ。ハワイの固有種のみでなく、あらゆる鳥がハワイの自然環境で繁殖し繁栄するのだ。いつの日か、ハワイは鳥の保護区もしくは禁猟区になる。(中略) 猟獣か否かは問わず、あらゆる鳥がその歌声と羽で、私たちの自然を美しく彩るだろう。ハワイは巨大な鳥の公園になるのだ。「鳥を見にハワイへ行こう！」というスローガンが掲げられる日が来るだろう¹⁹。

これが書かれた当時である20世紀前半は、ハワイが「楽園」として語られ、富裕層に人気の観光地として売り出されつつあった²⁰。色とりどりの美しい鳥を集めることは、当時の欧米諸国が抱く楽園像に合致するものだっただろう。またハワイを外国の鳥で満たそうとする委員長の発言は、これより約100年前にハワイの地元紙に掲載された「ハワイにはもっと鳴き鳥が必要です」という、ヨーロッパからハワイに渡った住民の声を思い起こさせる²¹。両者の動物の導入を巡る発言は、セトラーのハワイに対する植民地主義に基づく前提を伝えている。すなわち先住民の土地は、セトラーが自由に作り替えることのできる「空白の土地」として捉えられていたのであり、この前提はセトラーの間で西洋との接触以降、継続して共有されてきたのだ²²。

約1世紀を通じて持ち込まれた多様な動物は、ハワイの自然環境を大きく変えた。すでに19世紀中頃には、野生化した動物がハワイの森や人々の居住区域の自然に大きな被害を与えていた。1856年に発行された *Sandwich Island Monthly Magazine* には、当時のハワイ島の自然の変化について次のような投書がある。「この土地に住むヨーロッパからの移民の記憶に残っているであろう。以前、この平原(ワイメア)は木々に深く覆われていた。しかし今では何マイル行こうが木の1本すら見つけられない。(中略) 老木が倒れた後に若い木が生えてこない。過去30年から40年、動物が若い木々を食べ尽くしてしまったのだ²³。」このように外来種によるハワイの自然環境の変化は、セトラーの目にすらも

明らかだった。1852年の統計によれば、野生のウシは1万頭を超えていたとされる²⁴。ウシだけでなくヒツジやヤギなども爆発的に増加しており同様の被害をもたらしていた。19世紀中頃のカホオラベには、1万頭以上のヒツジが生息し、19世紀末には土地は丸裸の状態だったとされる²⁵。鳥の繁殖にも成功し、20世紀のハワイは世界で最も多様な鳥が意図的に導入された土地となった²⁶。ハワイに渡ったセトラは、母国やその他の多様な地域から動物を持ち込み、ハワイを自分たちの理想の土地に変えていった。その過程でハワイの自然は荒廃し、従来の先住民の自然に頼った生活のあり方はたち行かなくなった。このように、外から持ち込まれた動物とその自然や社会に対する影響は、ハワイにおけるセトラ・コロニアリズムの展開を体現するものであった。

Ⅲ. アメリカ本土からの自然保護運動の波及

野生化した外来種がハワイの自然環境に与える被害を食い止めるために、最初に行政に働きかけたのはプランテーション経営者だった。19世紀後半は、サトウキビの輸出がハワイの主要産業を担うようになっており、プランテーション経営者がハワイの政治に大きな影響力を持っていた時期である。サトウキビ農園は大規模な土地と大量の水資源を必要としたため、ハワイの自然環境の悪化は、経営者を悩ませる課題となりつつあったのだ。野生動物が山岳地帯に広がる森林や渓谷の自然を荒らす影響で、低地にあるプランテーションでは洪水や水不足などの被害が引き起こされていた。そもそもプランテーションの存在自体が、地元の自然環境を害する大きな原因であった。プランテーションを作るために大量の木々が伐採され、農地を水で潤すために川や湖から人口的に水が引かれたため、ハワイの従来の生態系には大きな負担がかかっていた。しかし経営者らは、プランテーションそのものの自然環境への害は棚上げし、外来種の排除を急務の課題と捉えたのである²⁷。

プランテーション経営者の働きかけで、1892年にハワイに野生動物に関する諸問題を管轄するための農林局が設立された²⁸。その2年後から農林局主導の野生動物の個体数管理の試みがハワイ全土で始まった。森林保護区が作られ、保護区の周囲にはフェンスが敷設され、野生動物の駆除を目的とする一連のプロジェクトが実施されるようになった²⁹。このようにハワイにおける近代的な自然保護を目指す活動は、グローバルな市場における砂糖の貿易を支えるための一環として始まったのであり、それはハワイのセトラに大きな利益をもたらすためのものだった。

20世紀後半になると、野生動物を駆除する目的が変化していった。プランテーションを守るためではなく、自然保護そのものを目標とするようになったのである。これはハワイにおける自然環境の管理の担い手が変化したことが影響している。20世紀後半は、本土で自然環境の危機が世論の注目を集めた時期だった。1962年にレイチェル・カーソンの『沈黙の春』が出版され、1964年には原生自然法（Wilderness Act）、1973年には絶滅の危機に瀕する種の保存に関する法律（Endangered Species Act）が制定された。1970年には初のアース・デイが祝われ、環境問題に取り組む必要性に対する意識が欧米諸国で広く共有されつつあった。その取り組みの一環として外来種の問題にも注目が集まった。1984年には、外来種が地球の様々な地域の生態系を破壊していると警告した著書、*Immigrant Killer*（移住してきた殺し屋）が社会の注目を集めた³⁰。環境問題に人々が意識的になり、外来種の危険性が

注目された時期、ハワイはアメリカの50番目の州となった。ハワイは、アメリカ全土の0.2パーセント程度の面積を占めるのみでありながら、国全体の絶滅危惧種の44%を有している³¹。そのような環境のため、ハワイは希少な種を守る使命感に燃える研究者や活動家から注目された。

1959年にハワイが州になると、アメリカ本土から多くの自然保護団体の関係者がハワイに渡り「本来の自然」を目指す活動を活発に行うようになった³²。自然保護団体によるハワイの生態系の回復に向けた活動は、自然を通じた欧米社会からのハワイに対するセトラー・コロニアリズムの歴史を考えれば、脱植民地化の動きのようにも見える。しかしこれは、ハンターを中心とする地元住民の間では複雑に受け止められた。この背景を理解するために、ここからマウナケア地域に生息する鳥のバリラをめぐる裁判に注目する。この裁判は、自然保護団体がハワイの自然管理への影響力を強める契機を作ったとされるものだ。

バリラ（キムネハワイマシコ）は、ハワイ島の固有種で絶滅危惧種でもあるハワイミツスイ類の一種である。ハワイの中でも極めて限定的な地域に生息し、またママネという木のみで子育てを行うという特徴を持っている。複数の自然保護団体が、ヤギやヒツジなどの外来種によってママネが食べられてしまい、マウナケア地域に住むバリラが絶滅の危機に瀕していることを訴えてきた³³。当時、ハワイ州の動物の管理を管轄していた土地自然資源省（Department of Land and Natural Resources、以下DLNRと略）は、ハンティングを推進してきたこともあり、外来種の駆除に積極的ではなかった。そのため複数の自然保護団体が協力し、DLNRを相手にバリラのための対策をとるよう裁判を起こした³⁴。

1973年に制定された連邦法によって自然保護団体は有利な状況にあった。絶滅の危機に瀕する種の保存に関する法律は、州をまたいで絶滅危惧種を保護することを定めるものであり、制定後は、絶滅危惧種の生存の有無にかかわる場合は、州の管轄下にあっても連邦政府が関与できるようになったためだ。バリラを含む11種のハワイの固有種が絶滅危惧種のリストに入り、これらの種を守ることが求められた。DLNRは、当初は連邦政府が州内の自然管理に口を挟むことは米国憲法修正第10条に違反していると抵抗したが、1978年に自然保護団体の訴えが認められ、2年以内にバリラの脅威となる外来種をマウナケアから排除することがDLNRに命じられた³⁵。これはその後のハワイにおける自然管理の主体を決定付けるものであった。当時の研究者は、判決の結果を歓迎し、次のように書いている。

（これまで動物保護の問題は）州内の問題として扱われていた。ハワイ州政府はなんの行動も起こさなかったためバリラは絶滅に向かっていた。しかしこの判決によって、バリラの保護が義務化され、科学者や学生がこれらの絶滅危惧種を研究し観察できるようになった（中略）ハワイ州の人々は、もう身勝手に自然を扱うことはできなくなったという現実を認識できないでいる（中略）一種の動物が、生態系全体にとっていかに重要な役割を持っているかを世間一般に理解させることは難しい（中略）（よって）連邦政府が監督する必要がある（中略）これは最終的にはハワイ社会にとって有益なことになるのだ³⁶。

この判決は、ハワイの野生動物管理に関する正しい判断ができるのは、ハワイ州政府や地元住民ではなく、連邦政府や自然保護団体であるという司法によるお墨付きも同然だった。固有種と外来種の管理をめぐる問題は、ハワイ州の自治が自然保護より下位に位置付けられていることを如実に示していたと言えよう。当時、アメリカ合衆国魚類野生生物局（United States Fish and Wildlife Service、以下、USFWSと略）は、ハワイの絶滅危惧種を救うためのプロジェクトチームを立ち上げ、職員をDLNRの獣獣課の監督としてハワイに派遣するようになった³⁷。USFWSのプロジェクトチームが結成されてすぐ、DLNRは次のような目標を掲げた。

パリラの生息地を守ることを優先する。現在、1,000羽以下のパリラが生息している。野生のヒツジの調査から、現行の管理方法では自然環境を守ることは不可能であることがわかった。（中略）ヒツジを1,500頭以上は残すという現在の政策は、ハワイ固有の生態系を守るという目標と矛盾する。（中略）新しい計画が必要であり（中略）これ以上、生態系を傷つけないための唯一の方法はマウナケアから完全に野生のヒツジを排除することである³⁸。

DLNRはパリラを巡る裁判以降、自然保護団体と協力し、実質的な外来種の駆除を行うようになった。その内のひとつは、ヘリコプターを使って大量の動物を一気に処理するもので、こうした方法は地元のハンターの間では非難の対象となってきた。ハワイ火山国立公園で始まった「ユダのヤギ(Judas Goats)」と呼ばれる駆除のプロジェクトは有名で、これは電波発信機をとりつけた動物を放してヘリコプターで追跡し、仲間と合流したところをヘリコプターからの射撃等で全滅させるものだ³⁹。プログラムの特徴的な通称について、筆者はDLNRの職員、自然保護団体の関係者、地元のハンターらなどに説明を求めたが、明確な答えは得られなかった。しかし1頭を利用して群全体を根絶する手法を、キリスト教のユダの裏切りに準えての命名であることが推測される。地元の人々が反対する外来種の大規模駆除の手法の通称が、ユダヤ・キリスト教圏の世界観の影響が如実な名称であることは、外来種の駆除が、本土のハワイに対する植民地支配の延長線上にあることを象徴するようである。

集中的な駆除の実施によって、パリラの判決の2年後には、ヒツジとヤギの姿はマウナケアから消えたと報告された⁴⁰。マウナケアのその他の野生動物も駆除の対象となり、1980年代を通じてイノブタなど他の外来種も同様に処理された⁴¹。この他の地域でも保護区にフェンスが設置され、ヘリコプターからの銃撃や罠による活発な駆除が行われた⁴²。

パリラの訴訟で勝利した後、自然保護団体はハワイで急速に保護区を拡大していった。ハワイで活躍する自然保護団体の代表的な団体であるザ・ネイチャー・コンサーバンシー（The Nature Conservancy、以下TNC）は多くの土地を保護区にするのに貢献した⁴³。1991年にはマウイ島で約10万エーカー、1994年にはハワイ島で約100万エーカー、1999年にはモロカイ島で約3万エーカーの土地をTNCの保護区に加えることに成功している。20世紀末には約200万エーカーの土地がTNCのフェンスで囲まれる対象となった。2018年のTNCのサイトには、雄大な自然の中に敷設されたフェンスの写真が掲載され、「この土地が有害な野生動物から自由になった」「本来の自然を取り戻した」と保護

区の拡大が報告された⁴⁴。

固有種の保護政策の促進は、自然保護の側面からは大きな前進だったかもしれない。しかしハワイの地元住民から見れば、自然保護の政策は新しいかたちでの本土からの抑圧であるとも捉えられる。20世紀の終わり、ハワイの自然環境の管理の主な担い手は、ハワイの先住民でないことはもとより、プランテーション経営者のようなハワイの白人セトラーですらなくなった。ハワイに適した動物、「本来のハワイ」の自然環境を決めるのは、本土から来た自然保護団体の研究者や活動家になり、ハワイにおけるセトラー・コロニアリズムは強化されたとも言えるだろう。

IV. 外来種の駆除に対する地元住民の抵抗

20世紀後半以降、自然保護団体は大量の外来種を駆除しつつ多くの土地をフェンスで囲い込み、ハワイの固有種の保護に努めてきた。地元のハンターは動物の駆除には概して批判的だが、ここからはその背景について考える。ハンターの声から、地元住民にとって野生動物、またその駆除が何を意味するのかを分析し、地元のハンターと動物との関係性を考察する。なお、地元のハンターには、ハワイ社会全体がそうであるように、先住民系、白人系、アジア系などさまざまなエスニック背景を持った人々が含まれる。エスニック背景によって動物の捉え方には差異があるが、本論文では自然保護団体と地元住民との衝突に焦点をあてるため、ここでは集団ごとの違いの詳細は論じないことをあらかじめ断っておきたい。

ハンターが駆除に反対する理由のひとつは、食糧確保に対する懸念であり、これは植民地化の過程で生じた有色人種、とくに先住民に対する暴力的な社会構造への問題意識がある。地元住民のひとり、2012年のハワイ郡区議会で州政府による野生動物の駆除の廃止を訴えて次のように陳述した。「私はハンターだ。私には2人の子供がいて、私たちは海と山の恵みを食べている。ヘリコプターを使って動物を殺したら動物がいなくなる。私はどうしたらいいのか。助けてほしい。私たち狩猟採集者には声がない⁴⁵。」この発言者のようにハンティングによって日々の食料を得ている地元住民は現代でも珍しくない。

野生動物の肉を日々の糧とするのは、住民の中でも先住民系の人々の間で最も顕著とされる。ハワイの住民の生活に関する調査から、少なくとも半世紀以上前からイノブタなどのハンティングは先住民の食生活を支えてきたことがわかっている⁴⁶。また筆者が現地でインタビューしたハンターの多くが、「森から動物が消えたら多くの先住民の家族が困るだろう」と発言し、先住民がとくに野生動物に依存しているという認識を語った。これはハワイ人が、植民地化の過程で排除され続けてきたことから、先住民でありながら州内で最も貧困率が高い集団であることが関係していることが考えられる⁴⁷。つまり外来種は、植民地主義の暴力に直面してきた先住民の暮らしを支えてきた土地の資源とも捉えられる存在だ。

また先住民にとってハンティングは生活の糧というだけでなく、アイデンティティと深く関わっている。現在のイノブタは、ハワイ先住民が持ち込んだ種と、その後他の地域のイノブタとの交配によって生まれた種である。これを根拠に自然保護団体は、現在のハワイに生息するイノブタを、先住

民の伝統に重要な種とは別の動物としている。しかし筆者のインタビューで、先住民系の人々が「ネイティブ」であるハワイ先住民が持ち込んだ動物の子孫を「外来種」と呼ぶことへの違和感を語った⁴⁸。また、先住ハワイ人が連れてきた動物が「ネイティブ」つまり「ハワイの在来種」でないのならば、先住ハワイ人が「ハワイのネイティブ」と呼ばれることに矛盾が生じるという問題がある。さらに、先住民が持ち込んだ動物を、ハワイの自然にとって「害」と捉えることにも不満がある。こうした不満からもわかるように、「外来種」「害獣」といった括りはハワイの外から持ち込まれた概念として住民に捉えられている。イノブタを害獣扱いすることは、先住民系の人々のアイデンティティに関わる問題であり、外来種の駆除は、先住民の歴史観を否定する側面があるのだ。

こうした先住民系の人々の動物観を、共にハンティングをしてきた移民の子孫である住民も理解していることが考えられる。アジア系住民もまた、土地の野生動物に強い思い入れがある。ハンターへのインタビューでは、野生動物を介して先住民やハワイの異なるエスニック集団が、共に生活してきた記憶が多く語られた。それはハンターの間で「ローカル・ハンティング」として語られている。1945年生まれで、オアフ島出身のハワイ先住民・ハオレ系のピーターセン氏は、幼少期の経験を次のように語った⁴⁹。

ハワイアンはイノブタを捕まえる。調理するのも上手だった。ハワイアンがイノブタを獲るのを見てローカル・ハンティングが始まったんだ。(中略) 調理はケンカの間だった。(笑) いや、ケンカっていうのは冗談だけど、中国系、ポルトガル系、スペイン系、フィリピン系、ハワイ系、どうやって料理するかとか、どの部位を誰が貰うとか、心臓とか肝、睾丸とか、どこが一番かって言い争う。出身の違いで人気の部位が違うんだ。(笑) だから半分冗談で半分本気で言い争っていた。部位はだいたいさばける人のものになっていた。フィリピン系は変な部位が好きだから誰にも取られることがなかったかもしれない。脳みそを料理する人たちもいるって聞きたいことあるけど、僕は会ったことがない⁵⁰。

ハンティングで獲物を得ることに成功すれば、個体の大きさによるが一頭でも相当な量の肉が手に入る。体重の個体差は大きく、30キロより小さいものから100キロを超えるものもあるし、肉の処理の方法にもよるが、小型のイノブタからでも15キロほどの肉は得られる。すぐに血抜きをしないと肉の味が落ちると言われることや、時代を遡るほど保存が困難だったこともあり、獲ったら可能な限りすぐに解体して、肉を分けるのが慣習である。こうした作業を通じて異なるエスニック集団間での友情が築かれたと住民の間で認識されてきた。

このような肉の分け合いに関する記憶は、プレート・ランチ（もしくはミックス・プレート）誕生の語りとの共通点が見出せる。プレート・ランチとは、19世紀のサトウキビ・プランテーションでの食事の時間に先住民や様々な移民が互いの国の食事を共有する過程で生まれたハワイ独自の食文化として認識されており、今ではハワイの定番メニューのひとつである⁵¹。プレート・ランチと同様に、ハンティングで得られた肉を使った食事は、異なる人種・エスニック集団を近づけてきたものとして地

元の人々に認識されている。またハンティングで得られる食事は、ハワイのどこでも買うことのできるプレート・ランチと違って、地元の森に日々入る人でないと、もしくは森に入っていく地元のハンターと近しくないと手に入らないものである。そのため、地元の野生動物の肉料理は、外向けではない地元住民の共生の物語を、住民らに肌で感じさせるものなのだ。こうした事情から、野生動物やそのハンティングは、先住民が移民を助けてきたこと、またさまざまなエスニック集団が交友関係を築いてきたことを象徴する側面があると言えるだろう。

野生動物とそのハンティングは、地元住民同士を繋げてきたのとは逆に、ハワイと本土との対立関係を住民に意識させる働きもあった。2012年、DLNRと住民らがマウナケアの土地利用について議論した際の事例をあげよう。住民らは、外来種の駆除が1970年代から行われているにも拘らず、その目的である固有種の個体数の回復が芳しくないことを指摘し、土地をフェンスで囲い続けること、また駆除の継続に抗議した。これに対して、当時のDLNRの長であった William Aila は「連邦裁判所の判事が、我々はそうしなければならないと言ったからだ」「連邦裁判所から、マウナケアのフェンスを囲い終えることと、地域にいる全てのヒツジを駆除することを命令された。私は牢獄に入るつもりはない。連邦裁判所の命令に従う」と発言した⁵²。これは、州政府が連邦裁判所からの命令だからというだけで駆除を継続しているともとれる発言であり、地元住民の怒りを買った。

多くの住民が、外来種排除の背景に本土の影響を見て抗議の声をあげてきた。先住ハワイ人の権利を守る目的を掲げる団体であるペレ・ディフェンス・ファンド (Pele Defense Fund) の Sydney R. Singer は次のように書いている。

最近では野生のヒツジ、ヤギ、イノブタ、シカ、ウシは、食べ物とは考えられなくなったらしい。代わりに「侵略種」と呼ばれている。(中略) これらの動物はずっと人々の食料源だった。何世代にも渡ってこれらの(動物)に依存してきた人々は現在危機に直面している。この人々の多くは先住ハワイ人の子孫だ。先住ハワイ人の子孫でない人たちもいる。これらの全ての人々はハンティングと採集の文化を共有している。今、野生の食材がハワイから消えようとしていて、また生活費は上がる一方で、人々はハワイでの生活を維持できないところまで追いつめられている。(中略) 多くの地元の人々が(ハワイでの生活費が高額なため)本土に移住しつつあるという報道が聞かれる。人々は環境保護の政策のために追い出されているのだ。政府はここに住む人間よりも自然を重視する。何世紀にも渡って人々の食料となり、地元の文化を支えてきた動物たちを消そうとしている。ハワイ州政府はハワイでの地産地消を推奨しているのに、なぜ地元の食材を消し去ろうとしているのか。おそらくアロハ・ステートでは、もう「外来種」に頼った自給自足のライフスタイルは歓迎されないのだろう⁵³。

「アロハ・ステート」とはハワイの観光業において多用されてきたハワイの愛称である。Jon D. Goss は「アロハ・ステート」を、アメリカ本土にとってのハワイの理想像を表す表現であると指摘している⁵⁴。Goss は、「ステート」という名称からアメリカの一部であることが確認され、「アロハ」はアメリ

かに王国を転覆されたことを許すハワイの優しさ、本土からの観光客を受け入れる温かさを表現しているとする。アロハ・ステートとは、本土からハワイに対する暴力を不可視化し、本土の理想であるハワイを表現するものである。この前提からすればペレ・ディフェンス・ファンドの Singer は、野生動物のいないハワイを、本土の理想の押し付けである「アロハ・ステート」と表現することで、外来種がいる状態こそが、本物のハワイであると主張しているに等しい。外来種を守ることは、先住民系住民にとってハワイの自然管理の決定の場に自らの声を反映させることであり、セトラー・コロニアリズムへの抵抗と言えるだろう。

外来種がいるハワイこそが「本物」であるという意識は、移民の子孫の間でも見られる。アジア系が大半を占める、ハワイ島における市民による公共の土地へのアクセスの権利を守る団体であるマウナケア使用者の会 (The Mauna Kea Recreational Users Group) でも、住民の生活を守るべきであり、外来種は残すべきだという抗議が繰り返されてきた。同会の会員は、参加したハワイ州議会議員に向かって、ハンティングの機会が奪われてきたことへの不満、駆除の残虐性に対する怒りを訴えた。参加者のひとり、「あなたたちは市民の声を忘れてしまっている！なぜこんなことをする？私たちに何をしているんだ？」と声を荒げ、会場の多くが賛同して拍手を送った⁵⁵。この会の参加者にとって、外来種がいる環境で、ローカル・ハンティングが行える生活こそが地元の正しいライフスタイルなのだ。

2012年に開かれたハワイ郡議会で、ハンターの期待を背負った2つのテーマが話し合われた。DLNRによるヘリコプターを使った大規模な駆除の正当性について、もうひとつは「ハンティングのための獲物管理諮問委員会 (Game Management Advisory Commission、以下、GMAC)」の設置についてである。GMACとは、持続的なハンティングのために、地元の有識者が集まって地域の野生動物の個体数管理について政府に対して提言を行うための委員会だ。アメリカ本土のほぼ全ての州にはこれに該当する委員会があるがハワイには存在しなかった。地元住民によれば、長く GMAC がハワイに存在しなかった理由は、自然保護団体がハンティングに否定的なためだ⁵⁶。しかし2012年、ついにヘリコプターでの大規模駆除の禁止と GMAC の設立がハワイ郡議会の賛同を得た⁵⁷。同議会の議長は、「ハンターの長年の訴えに心を深く動かされた」として次のように述べた。

今まで私たちはハンティングの問題が出てくるといつも、これは州レベルの問題だから、私たちは関与できない、と言い逃れをしてきた。しかし (中略) もうこれ以上「この問題は郡レベルでは扱えません」という言い訳をし続けることはできないと判断した。(中略) ハワイ島の問題を、もうこれ以上、遠いオアフ島にいる人たちに決めてもらうのを椅子に座って待っているわけにはいかない。(中略) GMAC は、私たちの自然資源を守るだけじゃなく、私たちの文化であり、伝統であるハンティングを守るための組織だ。ハンティングとフィッシングは何百年も前から私たちの伝統だ⁵⁸。

この発言が示すように、少なくないハワイの地元住民にとって、外来種は地元の文化やライフスタ

イルの維持に不可欠なものとして認識されている。そしてその外来種が本土からの圧力によって奪われつつあるという危機感が共有されているのだ。そのため地元のハンターの間では、外来種を守ることは本土からハワイの暮らしを守ることと同義とも言えるだろう。

しかしハワイ郡地方議会でのヘリコプターによる大規模な駆除を禁止する決定は間もなく覆された。DLNRは、駆除は連邦指令であるとしてハワイ郡議会の決定の撤回を求め、それが認められたのだ。よってその後も、政府のヘリコプターによる大規模な駆除は続いている⁵⁹。2018年の時点で、ハワイ島のマウナケアでは、年に6～10回、4日間程の集中的な駆除が行われている⁶⁰。当然ながらヘリコプターによる駆除の継続は、ハンターを失望させ「本土が勝手にハワイの自然の管理を決めていく」という不満の声が聞かれた⁶¹。外来種駆除の継続は、ハワイの自然管理の決定の場から住民が阻害されていると人々に感じさせるものだ。ハワイ島のハンターであり、ハンティングのガイドである日系のオナカ氏は、次のように述べた。

ハワイは environmental state になってしまった。「環境に優しい州」って意味じゃない。「自然保護団体に支配された州」って意味だ。よそ者がハワイに来て好みに自然を変える。自然保護団体は大きな団体で、金持ちだから影響力がある。「固有種を守らないと訴えるぞ」といつもハワイ州を脅している。(中略) 自然保護団体の狙いは、ハワイの土地を地元住民から奪って自分たちのものにするのだ⁶²。

この発言が物語るように、ハワイの正しい自然の姿は、自然保護団体と地元のハンターの間で大きく乖離している。また、地元の野生動物の肉をソウルフードと捉える地元の人々にとって、外来種の駆除は本土からハワイに対するライフスタイルの否定である。こうした背景から、地元のハンターはハワイにおける自然保護活動に否定的なのである。

V. まとめ

本論文では、ハワイの歴史を動物の移動に注目して概観し、また地域の自然に最も身近に接してきた地元のハンターに焦点をあて住民と動物との関係性、そしてその意味について考えてきた。歴史を振り返ると、18世紀以降の動物の導入は、ヨーロッパ人によるハワイの植民地化の過程であった。持ち込まれた外来種は、ヨーロッパ人にハワイでの安定した食糧の確保を約束した。また動物が入ってきたことは、ハワイの生態系に大きな被害を与え、先住民の生活基盤を崩す要因となった。先住民がハワイ社会の周縁に追いやられ、移民がその中枢を占めるようになった過程に、外来種は大きな役割を担っていたのだ。ヨーロッパ人による動物の導入は、ハワイにおけるセトラー・コロニアリズムを体現するものだった。

そこから一転して20世紀後半になると自然保護を目的とし、ハワイの外来種は駆除されるようになった。動物導入を植民地主義の拡大と捉えれば、外来種を取り除く行為は脱植民地化の過程のようである。しかし外来種の駆除は、もともとハワイの白人セトラーによって始まり、その後アメリカ本

土の研究者を中心に実施されるようになったものであり、ハワイの住民の声を反映しないまま駆除が進められた。外来種である地域の野生動物は、少なくない地元住民にとって、彼/女のハワイへの所属意識やアイデンティティ、文化を支えてきた存在だ。ハワイ先住民にとっては、先祖が持ち込んだ、伝統的に重要な動物が含まれる。またハワイに住む移民の子孫にとっては、先祖がハワイでさまざまなエスニック集団と共に生きる社会を築いてきたという物語の中心にある動物が外来種である。このような事情から、地元のハンターからすれば外来種の駆除もまたセトラー・コロニアリズムを象徴するものなのだ。

自然保護団体の目指す「本来の自然」や「外来種」の概念は、ハワイでハンティングを行う人々にとって、外から持ち込まれたものである。また外来種を排除し、固有種のみにするのは、異なるものへの寛容さを拡大してきたハワイ社会において逆行する思想だ。ハワイの地元住民の外来種排除に対する無理解は、自然保護への無関心として捉えられがちだが、これはセトラー・コロニアリズムへの抵抗であり、地元の自然観やライフスタイルを守る意図の表れとして検討されるべきだ。本来であれば、自然保護団体と地元のハンターは「ハワイの自然を守る」という共通の目標の下に協力関係にあってもおかしくないが、実際には対立してきた。これを乗り越えるには自然保護団体が、地元の歴史や文化的な事情を意識し、ハンターを中心とした住民との対話を通じてハワイの自然のあり方を考えていくことが求められるのではないか。地元のハンターと自然保護団体が協力関係を築くことは、自然保護の促進、また歴史的に続いてきた本土とハワイの力関係の不均衡を是正することにも繋がっていくだろう。

- 1 Alan Ziegler, *Hawaiian Natural History, Ecology, and Evolution* (Honolulu: University of Hawai'i Press, 2002). 「固有種」は「在来種」の一種であり、「在来種」は波や風や鳥などによって人間の手を介さずにハワイにたどり着いた種を指す。固有種は生息域が限定的な地域に限られた種を指す。
- 2 R. Warwick Armstrong, ed., *Atlas of Hawaii* (Honolulu: University of Hawai'i Press, 1983), 63.
- 3 Karl Jacoby, *Crimes against Nature: Squatters, Poachers, Thieves, and the Hidden History of American Conservation* (Berkeley: University of California Press, 2001); Peter Nabokov, and Lawrence L. Loendorf, *Restoring a Presence: American Indians and Yellowstone National Park* (Norman: University of Oklahoma Press, 2004); Louis S. Warren, *The Hunter's Game: Poachers and Conservationists in Twentieth-Century America* (New Haven: Yale University Press, 1997).
- 4 Ashanti Shih, "The Most Perfect Natural Laboratory in the World: Making and Knowing Hawaii National Park," *History of Science* 57, no.4 (2019).
- 5 Patrick Wolfe, *Settler Colonialism and the Transformation of Anthropology: The Politics and Poetics of an Ethnographic Event* (London: Cassell, 1999), 163.
- 6 自然科学の学術論文で、動物名にカタカナを使用することに合わせて、本論文でも動物名はカタカナで表記している。ただし、鳥や魚と言った分類に関しては漢字で表記する。
- 7 Raymond J. Kramer, *Hawaiian Land Mammals* (Rutland, Vt.: C. E. Tuttle Co, 1971), 17.
- 8 鳥ごとによる動物の持ち込みの歴史は、Prosper Q. Tomich, *Mammals in Hawai'i* (Honolulu: Bishop Museum Press, 1986)が詳しい。
- 9 John Ryan Fischer, *Cattle Colonialism: An Environmental History of the Conquest of California and Hawai'i* (Chapel Hill: University of North Carolina Press, 2015).

- 10 Patricia Seed, *Ceremonies of Possession in Europe's Conquest of the New World, 1492-1640* (Cambridge: Cambridge University Press, 1995), 35-39.
- 11 George Vancouver to Phillip Stephens, November 8, 1794, reprinted in *Voyage of Discovery*, 4:1596, quoted in Fischer, Chap. 1.
- 12 Alfred W. Crosby, *Ecological Imperialism: The Biological Expansion of Europe, 900-1900*, 2nd edition (Cambridge: Cambridge University Press, 2004), 286.
- 13 Andrew Berger, "History of Exotic Birds in Hawaii," *Elepaio* 35, (1974) : 65.
- 14 Jason Van Driesche and Roy Van Driesche, *Nature Out of Place: Biological Invasions in The Global Age* (Washington, D.C: Island Press, 2000), 26.
- 15 John M. Mackenzie, *The Empire of Nature: Hunting, Conservation and British Empire* (Manchester; New York: Manchester University Press, 1997).
- 16 H.D. Couzens, "Duck Shooting in a Crater," *Outing Magazine*, 1895, XXVI.
- 17 Ronald L. Walker, "A History of the Division of Fish and Game" (Honolulu: Department of Land and Natural Resources, 1978), 2.
- 18 M. J. Tomonari-Tuggle and Tom Arakaki, "Mokapu: A Paradise on the Peninsula, Stories from Not So Long Ago," 2014, http://www.mcbhawaii.marines.mil/Portals/114/WebDocuments/IEL/Environmental/MCBH_ethno_LoRes2.pdf. (accessed January 30, 2021).
- 19 Tuggle and Arakaki, "Mokapu," 23. 原文の抜粋は「Hawaii will be one vast Bird Park. "Go to Hawaii to see Birds!" will be the popular slogan.」である。
- 20 矢口祐人, 『ハワイの歴史と文化：悲劇と誇りのモザイクの中で』(東京:中央公論新社, 2002), p.121.
- 21 Berger, "History of Exotic Birds in Hawaii," 65.
- 22 Lorenzo Veracini, *Settler Colonialism; A Theoretical Overview* (Houndmills:Palgrave Macmillan, 2010), 14.
- 23 "Influence of the Cattle on the Climate of Waimea," *Sandwich Island Monthly Magazine*, February 1856, 46.
- 24 Robert C. Schmitt, ed., *Historical Statistics of Hawaii* (Honolulu:University of Hawai'i Press, 1986), 337-40.
- 25 Linda W. Cuddihy and Charles P. Stone, *Alteration of Native Hawaiian Vegetation: Effects of Humans, Their Activities and Introductions* (University of Hawai'i Press, 1990), 9.
- 26 Driesche and Driesche, *Nature Out of Place*, 26.
- 27 Pradyumna Karan and Unryu Suganuma, eds., *Local Environmental Movements* (Lexington: University Press of Kentucky, 2008).
- 28 Ronald L. Walker, "A History of the Division of Fish and Game" (Honolulu: Department of Land and Natural Resources, 1978), 2.
- 29 Charles P. Stone, "Non-Native Land Vertebrates," in *Conservation Biology in Hawaii*, ed. Charles P. Stone and Daniella B. Stone (Honolulu:University of Hawai'i Press, 1988), 88-95.
- 30 Carolyn King, *Immigrant Killers: Introduced Predators and the Conservation of Birds in New Zealand* (Auckland:Oxford University Press, 1984). 「移住してきた殺し屋」は筆者訳である。
- 31 Bamzi Banchiri, "Can Hawaii protect its endangered species without harming local business?" *The Christian Science Monitor*, April 9, 2016.
- 32 James O. Juvik and Sonia P. Juvik, "Mauna Kea and the Myth of Multiple Use: Endangered Species and Mountain Management in Hawaii," *Mountain Research and Development* 4, no.3(1984).
- 33 Juvik and Juvik, "Mauna Kea and the Myth of Multiple Use," 198.
- 34 Juvik and Juvik, "Mauna Kea and the Myth of Multiple Use," 199.
- 35 Juvik and Juvik, "Mauna Kea and the Myth of Multiple Use," 198-99.
- 36 Juvik and Juvik, "Mauna Kea and the Myth of Multiple Use," 200.

- 37 Patricia Tummons, "Terrestrial Ecosystems," in *The Value of Hawai'i*, ed. Craig Howes and Jonathan Kay Kamakawiwo'ole Osorio (Honolulu: University of Hawai'i Press, 2010).
- 38 Jon G. Giffin, "Pittman-Robertson Final Report 1972-1975: Ecology of the Feral Sheep on Mauna Kea" (Honolulu: Department of Land and Natural Resources, 1976).
- 39 Gerald R. Wright, "Alien animals in Hawaii Volcanoes National Park," in *Wildlife Research and Management in the National Parks* (Urbana: University of Illinois Press, 1992), 106.
- 40 Juvik and Juvik, "Mauna Kea and the Myth of Multiple Use," 200. しかし実際には根絶には至らず、後にヒツジもヤギも再び問題となった。
- 41 Wright, "Alien animals in Hawaii Volcanoes National Park," 107.
- 42 Driesche and Driesche, *Nature Out of Place*.
- 43 Grady Timmons, "Last Stand: The Vanishing Hawaiian Forest" (The Nature Conservancy, 2003).
- 44 TNCのホームページを参照。 <https://www.nature.org/en-us/about-us/where-we-work/united-states/hawaii/stories-in-hawaii/2018-impact-report/>. (accessed October 21, 2021).
- 45 *BILL 261 & Communication 731.1* (Hilo, 2012).
- 46 Jon K. Matsuoka et al., "Native Hawaiian Ethnographic Study for the Hawai'i Geothermal Project Proposed for Puna and Southeast Maui" (Cultural Advocacy Network for Developing Options for Oak Ridge National Laboratory, May 1996).
- 47 Shawn Malia Kana'iaupuni, Nolan J. Malone, and Koren Ishibashi, "Income and Poverty among Native Hawaiians," *Policy Analysis & System Evaluation* (Kamehameha Schools, 2005), 7.
- 48 筆者のフィールドノート (ハワイでのフィールドワーク中に行ったインタビューや参与観察の書き取りノート) より参照。 P. Smith, August 20, 2015.
- 49 本論文ではインタビューした人物の名前は仮名で名字のみを表記する。エスニック背景などは本人の自己申告に基づくものである。
- 50 筆者のフィールドノートより参照。 I. Petersen, February 11, 2013.
- 51 Steven H. Doi, "Hawai'i Exhibition Design: A Metaphor of the Mixed Plate," *Japanese American National Museum Quarterly* 12, Winter (1997): 8-9.
- 52 "Hunting Bills Go before Hawai'i County Council," West Hawaii Today, *Big Island Video News*, <http://www.bigislandvideonews.com/2012/06/08/video-hunting-bills-go-before-hawaii-county-council>. (accessed January 20, 2022).
- 53 Sydney R. Singer, "Singer: Lawsuit to Protect Hunting, Gathering Rights," *Hawaii 24/7*, June 26, 2012.
- 54 Jon D. Goss, "Placing the Market and Marketing Place: Tourist Advertising of the Hawaiian Islands, 1972-92," *Environment and Planning D: Society and Space* 11, no.6(1993): 663-88.
- 55 Big Island Video News, "VIDEO: Hunters hold hearing over DLNR fencing, game eradication," February 28, 2012, <http://www.bigislandvideonews.com/2012/02/28/video-hunters-hold-hearing-over-dlnr-fencing-game-eradication/>. (accessed January 20, 2022).
- 56 筆者のフィールドノートより参照。 C. Onaka, August 14, 2015.
- 57 "Aerial Hunting Ban Gets OK," *Hawaii Tribune-Herald*, June 7, 2012.
- 58 *BILL 261 & Communication 731.1* (Hilo, 2012).
- 59 Jobeth Devera, "Hunters balk over state's invasive animal kills by air," *Hawaii News Now*, September 12, 2017, <https://www.hawaiinewsnow.com/story/36342806/hunters-criticize-dlnrs-oahu-aerial-eradication-program/>. (accessed June 21, 2020).
- 60 "Dispute Continues about Aerial Shooting That's Killed Thousands of Goats, Sheep on Mauna Kea," *Hawaii Tribune Herald*, December 7, 2016.
- 61 "Hunters balk over state's invasive animal kills by air," *Hawaii News Now*, September 12, 2017.
- 62 筆者のフィールドノートより参照。 C. Onaka, August 14, 2015. 「訴えるぞ」と脅すという根拠は、1970年代のバリラをめぐる裁判 (固有種のバリラの保護を優先してこなかったDLNRが自然保護団体に訴えられて、外来種の駆除を実質的に行うようになった経緯) にある。